

No. 394【2020年2月14日配信】

一戸岳逸による連載「図書館めぐり」(担当:鈴木)

こんにちは! 嘱託員の鈴木です。

今回は、大正時代の図書館に関するお話です。

以前、「あおり歴史トリビア」第154号(2015年4月17日配信)でご紹介した一戸岳逸(1873-1939)は、東奥日報社の記者として働く傍ら、明治45年(1912)7月、貧しい子どもたちのために教育後援会を立ち上げ、学用品を支給するなどの援助をしていました。

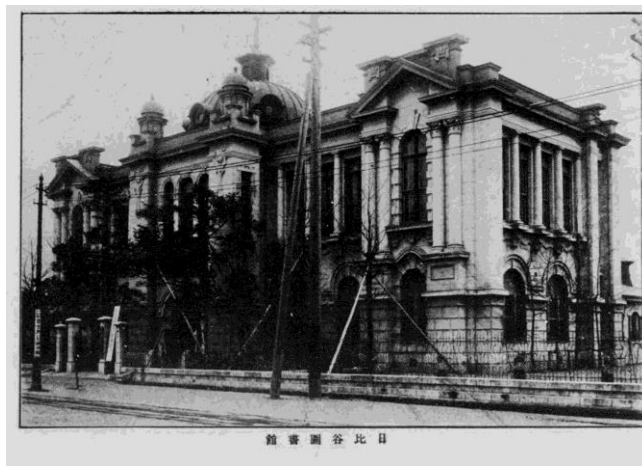
その後、大正7年(1918)9月には事業を一步進めて児童図書館を開館し、各小学校に巡回文庫を設置、さらに成人の社会教育のために通俗部も設けました。やがて、この児童図書館は大正9年7月に私立青森通俗図書館と改称されました。

その館長を務め、新聞記者でもあった一戸は、大正14年5月から同年12月にかけて、72回にわたり『東奥日報』に「図書館めぐり」という署名記事を連載しています。

連載記事は、日本図書館協会が同年4月10日から東京の南葵文庫^{なんき}および東洋文庫を会場に開催した、第19回全国図書館大会に参加した話から始まります。一戸は、この機会に東京帝国大学(現東京大学)附属図書館、東京帝室博物館(現東京国立博物館の前身)をはじめ、京橋・深川・日比谷・一ツ橋・浅草・本所といった小規模な公共図書館も訪れており、各館の構造や図書の分類方法、予算、所蔵冊数などを記録しています。



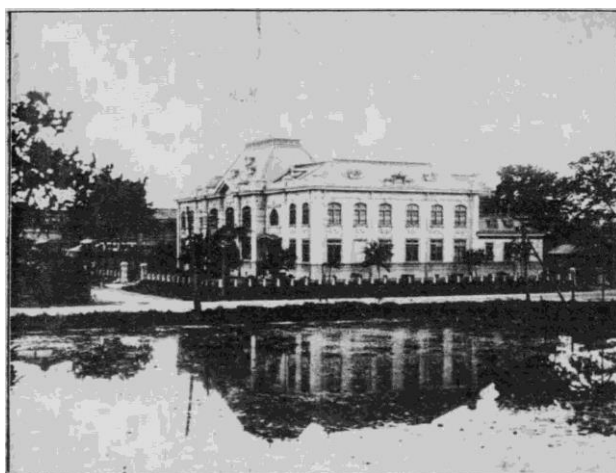
帝国図書館仮正面図
(『帝国図書館一覧』帝国図書館 1926年、
国立国会図書館デジタルコレクション)



日比谷図書館
(『東京百建築』建築画報社 1915年、
国立国会図書館デジタルコレクション)

実はこの2年前、大正12年9月1日の関東大震災で東京市内の図書館の多くが罹災し、当時はまだ復興の途上にありました。記事によれば、一戸は震災前の大正12年春にも図書館大会のため上京しており、その際いくつかの図書館を訪れて職員とも交流したことがありました。そのため、罹災に深く心を痛め、震災当時の状況や、復興の進捗についても話を聞き、記事にしています。

さらに、帰路に少し回り道をして視察した山形・福島・宮城・岩手各県の公共図書館についても記し、加えて以前に訪れた秋田県と北海道の図書館についても述べています。



秋田県立秋田図書館全景
(『秋田県立秋田図書館報 大正8年度』1921年、
国立国会図書館デジタルコレクション)

この頃、東北で県立図書館を持たない県は青森と福島だけであり、青森市でもその設立を望む声が出ていました。一戸も、大正14年1月に「東北の図書館 最も振はぬのは本県」という記事で、青森県の文化の向上と、県内各地の小規模な図書館の指導のためにも県立図書館が必要と論じており、こうした他県の事例を紹介することは、設立の機運を高める一助となったかもしれません。ちなみに、青森の県立図書館は昭和3年(1928)9月に開館しています。

一戸は、高い理想と情熱をもって精力的に各地の図書館を巡り、新しい図書館のあり方を模索していたのだと思います。また、新聞記者であったことから、そこで得た情報が記事として掲載され、大正期の東北・北海道の各図書館のようすや、東京の図書館の震災からの復興が文字に残されたことは、とても貴重で興味深いことではないでしょうか。